

筒井順永

筒井四郎（定次）

一、大和国添下郡に筒井順政・順興・順慶という者がいた。筒井は興福寺の衆徒の家であつた。彼らは昔から筒井に城を構えて住んでいた。領地は六万石余りであつた。特に応仁年中（一四六七～一四六九）から天正（一五七三～一五九二）の初め頃までは、国侍はそれぞれ独立心があり、戦の絶えない国となつて、各地で合戦がやむことはなかつた。筒井順慶は武芸に秀で、一族郎等が多い人であつたので大半の地方武士を従属させていた。

織田信長が畿内を支配した時、順慶は明智光秀を頼つて信長に仕えた。そして松永久秀を倒し、大和国中を支配し、大和国の頭領となつた。順慶と松永のことは後述する。

その後、天正十年（一五八二）六月、明智光秀が謀叛を起こした時、光秀は順慶に使者を送り、次のように伝えてきた。

「信長に恨みがあり、本能寺を急襲して信長を自害に追い込み、その後二条の屋敷へ攻め入り、織田信忠をも自害に追い込んだ。長年の盟友を頼むのは今この時である。味方をしてくれれば本望である。その褒美として大和・紀伊・和泉の三ヶ国を差し上げよう」

順慶は家臣を集めて相談をした。意見が様々に出たが、家臣が各々いうには「明智に味方するのが当然である」ということであつた。しかし、松倉重信は次のように忠告した。

「まず、明智に出陣をする旨の返事をし、そして八幡山まで出馬をする。八幡山は險しく、敵の侵入を防ぐには良いところであるから、暫くその場に陣取つて様子を見るのが妥当である。恐らく羽柴秀吉は中国地方における毛利攻めから戻つてきて明智を討伐するであろうから、頃合いを見計らつて秀吉側へ密かに味方し、明智を裏切るのが得策であろう」

これによつて、順慶の出陣が決定した。順慶はこの旨を各々に通知した。そして一万八千の軍勢で八幡山に陣取つていたところ、予想通り秀吉が中国地方の毛利氏と和議を結び、撤退して尼崎へ帰つてきた。順慶は森好高を使者として秀吉のもとへ送つた。その内容は「（秀吉の）味方として着陣した。明智を裏切ろう」というものであつた。秀吉は「もつともな意見で満足に思う。一層

頼りにしている」と返答した。さて、山崎の戦では、秀吉の先陣をつとめた高山右近と中川清秀が明智の先陣を突き崩した時、順慶も八幡山から進軍し、淀川の周辺で戦いに敗れた敵を五、六百人ほど討ち取り、その首を秀吉へ献上した。秀吉は、順慶の行動について、形勢を窺っていたのではないかと考えたが、自軍に加勢したことに関しては満足であるとして、信長の時代と変わることなく大和国の大将であるべき旨を順慶に命じた。この時から順慶は秀吉に従って各戦場に赴いたが、その後間もなく死去した。

順慶の養子である筒井定次が、引き続き大和国の大将に命じられた。秀吉が天下統一を成し遂げた時、天正十三年（一五八五）、筒井定次へ伊賀国を与え、定次は伊賀守に任じられた。大和国については、秀吉の弟である羽柴秀長に紀伊・和泉・大和の三ヶ国を与えた。秀吉の指示により、筒井城は取り壊され、郡山に新しい城を築いた。その城郭の区画も秀吉の指示によるものが現存する。また、国侍は秀長の家臣となった。

天正十九年（一五九一）正月二十二日、羽柴秀長が死去すると、養子の羽柴秀俊（秀保）を中納言とし、三ヶ国を変わりなく与えた。間もなく、文禄三年（一五九四）、秀俊は思いもかけず急死した。秀俊は豊臣秀次の弟であり、秀長の死後養子に命じられたとも噂されている。一説には吉野十津川の湯を見に行った際、川岸の高い崖の上から下を見て、そばにいた小姓に「この淵に飛び込むか」といったので、その小姓はそのまま秀俊を抱きかかえて淵へ飛び込み、秀俊も小姓も共に死去したという。跡継ぎもいなかったため家は断絶し、国侍は皆もとの領地を離れ浪人となった。

その中の大将格は箸尾・布施・十市の三氏であった。秀吉はこれらの者に領地を少しずつ与え、郡山城へは増田長盛を遣わし、二十万石の領地を与え、紀伊・和泉・大和三ヶ国の代官に任じた。郡山城には外曲輪がなかったので、長盛はこのことを秀吉に伝え、外曲輪を作り上げた。

秀吉死後、慶長五

年（一六〇〇）九月、石田三成が謀叛を起こした時、増田長盛は西軍に属し、関ヶ原の後方部隊として近江国水口まで出陣した。西軍が敗北したため、長盛が待機していたところ、そこへも徳川家康が討伐に向かう意向を示したので、長盛は種々謝罪の言葉を述べて剃髪し、高野山へ入った。

長盛は大坂より出陣の際、郡山城は要所であるので、自身の騎馬隊約千騎のうち、七百騎は郡山に残し、家臣も大半は残し、関ヶ原へは騎馬隊三百騎を連れて出陣した。これほど多くの軍勢を持つことができたのは代官をつとめていたからであった。そうして郡山は城主が不在となった。長盛は水口より高野山へ入ったとも切腹したともいわれている。あるいは討ち取られたとも島流しの刑に処されたとも種々噂がある。

一、郡山へも東軍の軍勢が押し寄せてくるのであったので、大和国中の百姓は浪人となっていた国侍を大将にし、一揆を起こして郡山へ押し入り、町の出入口をあちこち放火し、あるいは略奪をおこなった。留守の役をしていた家臣達には策がなく、最早これを鎮めることもできず、妙案も出ないように思われた。

それ以前に、渡辺勘兵衛（了）という浪人がいた。彼は秀吉に仕えることを望んでいた。それを聞きつけた増田長盛は、頃合いを見計らって勘兵衛を秀吉に引き合わせるように取り計らおうと考え、勘兵衛に合力米一万俵を与えてひとまず自分の客人として扱い、城の三の丸に滞在させた。それ故、勘兵衛は采配等には関与しない立場であった。しかし勘兵衛は「このようにあれこれと取り乱すことはもつてのほかである。きちんと対処せねばならない」と家臣にいった。家臣は「このように家中が混乱して治まらないなか、まして郷中のことに關しては処置すべき方法がない」と返答した。その時に勘兵衛は「誰も統率するのが困難であるというならば、私が頭領となり、指示をして鎮めてみようではないか」といったので、その発言に家臣は皆同意した。「きつと敵の軍勢もやって来るであろうから籠城戦に定めるのが上策である。そのため、各々の妻子を人質として出すように」と勘兵衛から指示があったので、家臣は人質を取りまとめ、本丸に移し置いた。

それから勘兵衛は軍勢を二、三百人ずつ用意した。方々へ

攻撃を仕掛け、一揆の首謀者を捕縛し、あるいは人質を捕らえ、あるいは首を切り、郡山のうちの柳町五丁目というところに獄門にかけた。

これによって、ひとまず国内の大部分は鎮まった。そして籠城の話し合いがおこなわれ、部隊の配置を決めることとなった。皆は「とにかく、外曲輪を捨てて二の丸と三の丸を守るべきである」といったが、勘兵衛は受け入れなかった。話し合いは、しばらくの間外曲輪を守り、様子を見て、その上で内曲輪へ籠るのがよいであろうという形で決着した。

一方、郡山へ向かう軍勢は、筒井定次・藤堂高虎、その他二、三人が頭領に任命された。この軍勢は郡山より約一九・七キロメートル北にある山城国玉水というところまでやってきた。彼らは玉水に待機して郡山へ使者を送り、城を明け渡すよう迫ってきた。勘兵衛とその他の家臣は次のように返答した。

「城主である増田長盛は免罪されて直接高野山へ入ったとは聞いているが、留守役である我々家臣に対しては、長盛からは何も聞かされていないので、勝手に城を明け渡すことはできない。もし、軽率に領内に押し入ったならば戦が始まることになるであろう」

そして勘兵衛はいっそう持ち場を堅固なものにして城の守備態勢を整えた。攻め手側は使者を遣わし、主君である長盛を裏切って城を明け渡してはどうかと働きかけたものの、守備側はそれには答えず使者を追い返し、再びこのようなことがあるならば、使者をも斬り捨てるとの旨を言い渡した。大和国は元来筒井氏となじみが深い国であるので、筒井定次は策略をめぐらし、土着の人々を蜂起させ、夜中に郡山へ押し入り、略奪・放火などをおこなおうとした。これを勘兵衛は早速聞きつけて、軍勢二、三百人で出陣し、村人四、五十人を討伐あるいは捕縛し、全員の首を切つて獄門にかけた。その後、勘兵衛は一層嚴重に城の守りを固めた。攻め手もなす術がなく、進撃することもできなかった。この次第を高野山にいた長盛へ伝えたところ、長盛より高田小左衛門という者が郡山へ遣わされた。長盛からは「郡山城は間違いなく明け渡すべきである。これまでの振る舞いには満足している」という旨が、勘兵衛方へ自筆の書状をもって通知された。

そうして、勘兵衛達は評議の上、城を明け渡すことに決し、敵方へ使者を送り、次のような提案をおこなった。

「城を明け渡すにあたり、城内には多くの財

貨があるので、城を受け取る際には見張り所に待機する者が財貨を受け取り、役人だけが城の中へ入り、帳簿にて財貨を確認した上で譲渡し、そして城も明け渡し。もつとも当方も城内には役人だけを残し、他の軍勢は城外へ撤退させよう」
攻め手からも「もつともなことである。そのように事を進めたい」という旨の返答があった。

そのような約束が交わされたので、勘兵衛は郡山の籠城兵を大安寺だいあんの旧境内地へ撤退させておいた。この場所は郡山から二・二キロメートルほど北東に位置し、そこに勘兵衛方の兵士は待機した。「間違はなく城を明け渡し、家臣が全て残らず城を出るまではどこへも退去してはならない」と、勘兵衛は彼らに厳重に命じ、その場へ留まらせておいた。一方で勘兵衛は軍略をめぐらし、自身の屋敷に鎧武者よろい百人ほど、その他足軽二百人ほどを棒を持たせて隠しておいた。

さて、攻め手は町の出入口に待機し、見張り所に財貨を受け取る者がやって来た。そこで門の鍵を渡したところ、彼らは蔵を開け、雑兵が本丸へ押し入り、財貨を略奪して逃げていった。勘兵衛は、このようなことは見過ごすことのできない言語道断の行為であるといって、自身の屋敷に隠しておいた部隊を出動させ、門の鍵を取り返し、敵を追い出して門を閉め、敵の頭領へ使者を送った。勘兵衛は「そちらが約束に背き、このような事態に至った。この上は城を明け渡すことはできない」といい、大安寺まで撤退させていた兵士を呼び戻した。勘兵衛方はほとんど決戦におよぶ態勢であった。一方、攻め手の頭領である藤堂高虎は和議を持ちかけた。高虎は、「このような有り様は少しも大将である自分の知るところではなかった。何はともあれ、そちらの望み通りの方法で受け取るので、城を明け渡してほしい」と持ちかけてきた。しかし勘兵衛は納得せず、最早攻撃を仕掛ける様子であったので、何度も話し合いがなされた。

その間に、南都興福寺の大乗院だいじょういんの仲裁により和睦が成立した。それならば先の約束通り間違いないようにと念を押した上で、城の受け渡しが決まり、財貨の受け渡しが帳面の確認をもって混乱なく終了し、そして城は明け渡された。

その時、勘兵衛は終始一貫して頭領の立場にいた。一人で

戦術を立てて上手く乗り切ったことに高虎は感心し、自らの十分の一の領地（二万石）を与える約束で勘兵衛を登用した。

ちょうどその頃、石田三成が謀叛を起こし、七月晦日、西軍の攻撃により伏見城が焼失した。よって、郡山城を取り壊し、これを伏見へ移築した。しかし町屋は取り壊さず、そのままにしておいた。この時、大和国は大部分が代官支配となった。

その後、大坂の陣の前に、筒井氏の子孫を徳川家康が探していたところ、順慶の甥に筒井定慶という浪人が大和国にいた。家康は定慶を呼び出し、領地一万石を与え、与力三十六騎を付けて郡山の古城を預けた。元和元年（一六一五）四月、大坂夏の陣の前、豊臣秀頼方の軍勢が当地を焼き払うために大和路へ出た。大將は大野治房、与力は箸尾勘兵衛・布施左京亮・万歳・細井戸・狭川左介・高井薩摩などであった。これらの者は皆浪人として、大和国の各地に点在していたが、大坂から大野主治房が呼び寄せてこの一戦の頭領に任命した。そして彼らの古参の家臣を呼び集めさせて籠城し、治房の軍勢として編成した。幸い彼らは大和地方の事情に精通していたので、他に治房自身の軍勢も少し加えた二千騎ほどで、大坂より夜中に闇晴越がりしえという難所を越えて、郡山まで道のり約二七・五キロメートルの場所に着陣した。

まず手初めに、郡山を放火すべきであるということになり、木之嶋このしまというところで軍勢を分け、二手に分かれて九条口と奈良口から攻め入った。まず、鉄砲を撃ち、関とぎの声をあげて火を放った。郡山城には筒井定慶がいたが、関の声に驚き、大急ぎで郡山城東口の柳の門というところから高田というところへ出て、東の山の中の福住すみというところへ落ち延びた。城に残って敵の侵入を防ぐ者もいなかったため、大野軍は城下にあった町屋や立派な屋敷を放火して、狼藉ろうぜきを働いた町人を何人か捕縛した。

それから南都を放火しようとした時、徳川家康と秀忠が伏見に到着した。家康は、秀頼方の軍勢が大坂から大和国へ向かい、放火におよぶのではないかと疑い、

水野勝成・堀直寄の二人を早速南都へ向かわせた。二人が南都へ着陣したという噂があつたので、大野軍は南都放火を断念し、直接郡山の南口五町目というところへ進んだ。そこから約一五・七キロメートル南の當麻今井村(原文のまま)という大きな村を焼き払うこととなり、道すがらあちこちを放火して行つた。今井というところは元々兵部ひょうぶ(河瀬兵部丞または河瀬八郎兵衛尉宗綱ともいう)という一向宗の僧侶が築いた寺じ内町ないまちであつたので、兵部の一族が檀家を動員し、今井の西口まで出て行つた。そこで鉄砲を撃つたので、大野軍は今井に攻め入ることができず、そこから北西の方角の法隆寺を通り、関屋越せきやこえにて退却した。その途中に百濟村くだらというところをも焼き払つた。

その頃、高取城には本多利朝が三万二千石の領地を持って居城していた。また、宇智郡二見ふたみというところには松倉重政が一万石の領地を持って居城していた。大野軍が大坂から大和国を焼き討ちに來たことを聞きつけて、早速騎馬隊六十騎ほどで出陣した。それから約一一・八キロメートル進み、御所ごせの西三本松というところで具足櫃ぐそくびつに腰をかけて兵糧を食した。

その間に、松倉は高取と御所の領主へ使者を送つた。その内容は、「大坂からの軍勢が焼き討ちにやつて來たことを聞き、これを阻止するために、ここまで出陣した。あなた方も出陣すべきであろう」というものであつた。ところが二人は「大坂からの軍勢が大人数で各地を焼き払い、高取や御所へも押し寄せてくるであろうことを聞いているので、出陣はしない」と返答した。松倉はとんでもないことであると腹を立てて「我々よりも領地が多く、人数も多く動員できるというのに出陣しないといふことは、私を討ち死にさせて、つまるところは出家されるおつもりか」と非難した。

松倉は、後方部隊がなくとも、すぐに出立して大野の軍勢を阻止しようと、馬の速度を上げて急いだところ、大野軍が早くも関屋まで引き返したことを聞きつけた。松倉はただちに片岡を通つて関屋へ攻撃をしに行く覚悟で、単独で急ぎ追いかけたが、時間がかかつたので、その間に大坂からの軍勢は国分くにぶまで引き返してしまつていた。しかし松倉は国分まで追いかけて、疲弊した敵の兵を三、四人討ち取り、また一、二人を生け捕りにし、それを伏見へ

献上した。家康と秀忠は、大坂の陣で討ち取った一つ目の首であると喜んだ。松倉の領地である二見から国分へは三一・四キロメートルほどの距離があった。その時、大坂から大和国へ押し寄せてきた軍勢は三万とも五万ともいわれている。大和国中の者は皆東の山中へ逃げ落ちていった。

大坂の陣の後、松倉は島原しまばらに六万石余りの領地を与えられた。その後、松倉は病死し、松倉勝家が跡を継いだ。筒井定慶は伏見へ向かおうと、山城国の近辺まで来たところ、世の人がいうには、定慶は戦いもせずに郡山の城郭から撤退したとの噂に接したため、途中で南都へ帰り、興福寺の妙喜院みょうきいんで切腹したと言い伝えられている。

一、大坂城落城の後、とにかく郡山に城がなくては不都合であろうと家康は考え、再び伏見城を取り壊し、郡山へ移築した。そこに水野勝成を向かわせ、六万石の領地を与えた。水野は六年間居城した。城の普請ふしん（城郭整備）も大部分は水野が滞りなく済ませた。

水野は転封てんぽう（領地替え）を命じられ、そのあとには松平忠明が十二万石を拝領して入城した。寛永三年（一六二六）、將軍徳川家光上洛の際、將軍は南都へも参詣するとのことであった。したがって、郡山に一泊する予定となり、本丸御殿など、幕府による整備があった。また、東大寺九折山つづらお（若草山）の麓に茶屋を建てた。しかし参詣はなかった。

松平忠明は郡山城に二十年居城し、寛永十六年（一六三九）、播磨国姫路への転封が命じられた。その一、二年前、幕府へ願い出て三万石の延高のべだかが認められ郡山は合計十五万石となった。

その後、本多政勝・本多政長・松平信之・本多忠平が居城した。